

概要

- 本県のトルコギキョウは生産額で全国3位の主産県で、10～12月にかけて出荷する秋出し栽培においては主要産地に位置付けられている。しかし単収（出荷率）の低下が課題となっており、高品質で安定した生産技術の確立が急務となっていた。
- そこで、RTF苗を利用した栽培技術の本県の状況に応じた形で確立し普及させるため、3.0節以上の大苗と水分管理の技術を確立し、県内産地へ広く普及を図った。
- 大苗を用いた栽培技術を導入割合が増加した結果、系統共販における単収が向上、出荷量が増加した。

具体的な成果

1 大苗による秋出しトルコギキョウの栽培技術の確立

■ 技術の普及状況

大苗栽培技術の導入面積 **R3年度 0.7 ha → R4年度 2.7 ha → R5年度 4.5ha**
(県内面積比 7%) (29%) (52%)

2 秋出しトルコギキョウの単収向上と出荷量

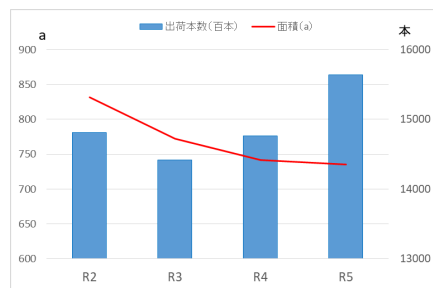
■ 大苗による定植と定植初期の水管理技術により安定生産技術が確立

- ① 系統共販における単収の向上 **R3年度 19.4千本/10a → R5年度 21.3千本**
(出荷率 59%) (64%)
- ② 系統共販における出荷量の増加 **R3年度 144万本 → R5年度 156万本**

3 栽培の手引きを作成

関係機関で構成されたトルコギキョウプロジェクトにおいて、大苗定植技術のポイントを掲載した「秋出しトルコギキョウ栽培の手引き」を作成した。

■ 関係機関に配布・共有し技術導入の推進、産地の維持拡大を図っている。



系統共販における面積と出荷量

普及指導員の活動

令和4年度

- 福岡県農林水産部園芸振興課、経営技術支援課（専門技術指導員）、農林総試、JA全農、関係普及指導センターによりトルコギキョウプロジェクトを開催。
- 県内5カ所で、従来の苗と大苗の比較及びかん水管理に関する現地実証ほの設置。

令和5年度

- 前年の実証ほの結果を検討するとともに、優良農家の詳細なかん水管理について調査するために県内2カ所において実証ほを設置。
- 実証ほの結果から、大苗定植技術に関するポイントの他、福岡県内における秋出しトルコギキョウの栽培について記載した栽培の手引きを作成した。

秋出しトルコギキョウ栽培の手引き



令和6年3月
トルコギキョウプロジェクト

生産体制・技術確立支援事業（令和4～5年度）
～大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の普及～
福岡県農林水産部園芸振興課・経営技術支援課

普及指導員だからできたこと

- ・ 関係機関を含むプロジェクトチームにおいて、各産地の生育状況や問題を把握した普及指導員からの情報を基に専門技術指導員がコーディネートし、的確な課題設定ができた。
- ・ 新技術導入する生産者の不安を普及員が丁寧に技術指導し、産地への影響が大きい農家を選定。計画的に実証ほの設置・運営を行ったことが急速な面積拡大を可能とした。
- ・ 各産地での実証ほの運営を行い、詳細な調査や調査結果の分析を行ったことで栽培の手引きが作成できた。

福岡県

大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の普及

活動期間：令和4～5年度

1. 取組の背景

福岡県は、トルコギキョウの生産面積が約40ha、生産額は全国3位の生産県である。特に10～12月にかけて出荷する秋出し栽培においては主要産地に位置付けられている。しかし、担い手の高齢化等で生産面積、生産量は減少傾向にあり、ニーズに合わせた品種の選定等、技術の複雑化、高度化によって出荷率の低下が課題となっており、高品質で安定した生産技術の確立が急務となっている。

RTF苗を利用した栽培体系は、熊本県において、9月定植、12月出荷の作型で導入され、生育の揃いや品質向上効果があり普及している。一方、福岡県は、定植時期が熊本県よりも高温となる7月下旬～8月中旬が中心であり、活着までの水管理が難しく、RTF苗では品質が低下しやすい。これまで、県内ではより活着しやすい小苗（2.5節苗）での定植が推奨されてきたが、県内の先進産地では、本技術を応用し大苗（3.0節苗）を定植し、定植後の水管理を厳密に制御することで、品質が向上し、さらに生育揃いが良くなった事例が出てきた。

そこで、秋出しトルコギキョウの出荷率向上と安定生産を目的とし、3.0節以上の大苗と厳密な水分管理を組み合わせ、大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術として県内産地へ広く普及を図る取組みを実施した（図1）。



図1 小苗、大苗及びRTF苗の姿

2. 活動内容（詳細）

生産体制・技術確立支援事業（令和4～5年度）を活用し、普及指導員が中心となって「大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の確立・普及」に取り組んだ。具体的には、実証展示ほの設置や技術指導、現地検討会、現地実証試験の設計、実績検討会、市場等との意見交換会などを実施し、出荷率の向上、安定生産技術の確立と推進に取り組んだ。

■令和4～5年度

- ・農業革新支援専門員を中心に、普及指導センター、園芸振興課、農林業総合試験場、JA 全農ふくれんによるプロジェクトチームを結成した。

- ・プロジェクト会議等で大苗定植の技術について整理し、普及指導員の理解を深め、技術導入の推進を図ると同時に、令和4年度は、県内で秋出しトルコギキョウの生産が多い、福岡、北筑前、久留米、飯塚、田川の5普及指導センター管内に実証ほを設置した。併せて、大苗定植技術のポイントとなる定植直後の水分管理について調査を実施した。令和5年度は、2普及指導センターに実証ほを設置した。

- ・実証ほの結果から、大苗定植技術に関するポイントの他、福岡県内における秋出しトルコギキョウの栽培について記載した栽培の手引きを作成した。

- ・プロジェクトチーム員である JA 全農ふくれん主催で、県内各産地の普及指導員、JA 営農指導員を招集し、主要取引市場等との意見交換を実施した。

3. 具体的な成果（詳細）

- ・令和4～5年度の実証ほの結果から、優良な事例では、定植直後のかん水量及び回数を多くし、細やかな水分管理を実施したことが明らかになった。

- ・普及指導員が率先して技術導入を推進したことで、一部地域で実施されてきた大苗定植の技術の導入面積が増加した（図2）。

- ・大苗定植技術の導入に伴い、秋出しトルコギキョウにおける単収（10a 当たりの出荷本数）が向上してきており、生産者数や生産面積が減少するなか、共販出荷量が維持された（図3）。

- ・プロジェクト会議において大苗定植技術に関する要点を整理し、県内各産地の事例等からの「秋出しトルコギキョウ栽培の手引き」を作成した。

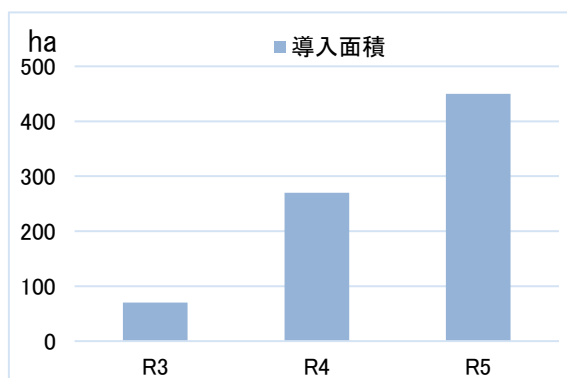


図2 大苗定植技術の導入割合

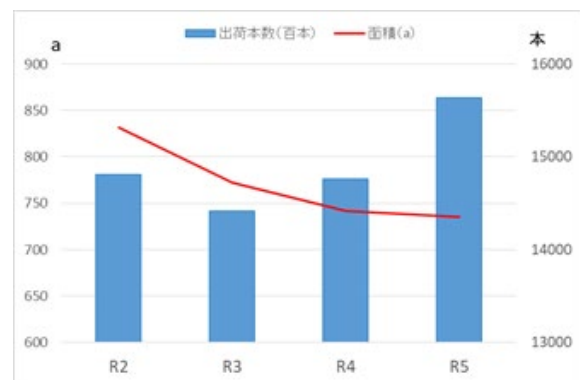


図3 面積及び出荷本数の推移

4. 農家等からの評価・コメント(A氏)

秋出しトルコギキョウの大苗定植を実施した。切り花の長さや色鮮やかさ、形態的な安定性など、品質が全体的に向上した。特に、収穫時期を集中でき

労力効率の向上できた点良かった。今後も品種間差の検証を行い効率的な苗生産の技術を学びたいと思う。

5. 普及指導員のコメント（飯塚普及指導センター）

本管内は、トルコギキョウをはじめとする多様な花きの産地として、県内市場のみならず、関西から関東市場まで幅広い販路を築いてきた。中でも、秋出しトルコギキョウは、その安定した品質と鮮やかな色彩で高い評価を得ている。近年、種子冷蔵や冷房育苗など、秋出しトルコギキョウの安定生産に向けた様々な取り組みが進められてきた。本事業の導入により、品種構成を中心とした新たな生産技術が確立され、基本的な栽培技術も再検証されるようになった。

近年、秋出しトルコギキョウの単価が安定している中、本事業で確立された安定生産技術の導入は、経営の安定化にも大きく貢献している。安定生産技術の確立は、単なる栽培技術の向上にとどまらず、福岡県産秋出しトルコギキョウのブランド強化にもつながる。本事業で培われた成果を活かし、管内全体で力を合わせ、持続可能な花き産地づくりを進めていくことが、今後の目標となる。

6. 現状・今後の展開等

プロジェクトチーム内での技術の整理によって、実証ほの設置と同時に普及が図られ、導入面積は順調に増加した。今回の実証によって定植直後の水分管理が重要であることが明らかとなり、次年度詳細な調査・分析を実施することとした。また、土壌水分管理技術の分析結果と併せてこれまでの栽培技術の蓄積から「栽培の手引き」を完成させた。

今後は、「栽培の手引き」の活用、関係機関による連携を継続させることで、さらなる普及推進を図り、新たな担い手を確保すること共に産地の維持・発展につなげていく。